試　訳

フィヒテ著 『フリードリヒ・ニコライの生涯と奇妙な意見』（1801 年）(1)

勝　西　良　典

解題に代えて，あるいは本誌掲載に関する弁明

以下に訳出するのは，ヨーハン・ゴトリープ・フィヒテ著，A・W・シュレーゲル編『フリードリヒ・ニコライの生涯と奇妙な意見。前世紀の文学史ならびに幕開けしたばかりの今世紀の教育学に関する論考』（*Friedrich Nicolai's Leben und Sonderbare Meinungen. Ein Beitrag zur Litterargeschichte des Vergangenen und zur Pädagogik des angehenden Jahrhunderts*, 1801. 以降，『フリードリヒ・ニコライの生涯と奇妙な意見』と略記）の編者序文，序論，及び第 1 章である。底本には，アカデミー版全集（*J. G. Fichte —Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, Reihe I, Bd.7, hrsg. von Hans Gliwitzky und Reinhard Lauth, Stuttgart 1988. 以降，GA I/7 と略記）所収のテクストを用いた。訳文中の［　］は訳者による補足であり，訳文の欄外の数字はこの版のおおよその頁付けを示している。テクストのゲシュペルト表記については訳文では傍点を付したが，人名のゲシュペルト表記は煩瑣になるため無視した。版によるテクストの異同も含めて，この著作に関する詳細な紹介については全文訳出後に執筆を予定している正式の解題に譲るが，ここでは哲学研究においてさほど注目されていないこの著作の試訳をキリスト教文化研究所の紀要に掲載することに関する弁明の用をなす程度の説明をしておきたい。

『フリードリヒ・ニコライの生涯と奇妙な意見』は，フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte, 1762–1814）が 39 歳の時の著作で，フィヒテを中心としてドイツで花開こうとしている新しい観念論の哲学を通俗的啓蒙主義の

立場から痛烈に批判したベルリンの書籍商にして著述家・批評家でもあるフリードリヒ・ニコライ（Christoph Friedrich Nicolai, 1733–1811）に対する報復的攻撃の書である。カント（Immanuel Kant, 1724–1804）を迎えて講壇哲学がいよいよ主流となり全盛期を迎えようとしていた当時のドイツ（プロイセン）にあって，書籍商の跡取り息子であるニコライは，在野の知識人として自ら通俗的啓蒙の牙城たらんとし，出版業も営む自らの業態を活かしつつ，自らが執筆した旅行記，（風刺）小説，自伝，及び自らが立ち上げた書評誌を通じて，フィヒテ，シェリング（Friedrich Wilhelm Joseph Schelling, 1775–1854）に代表される最新流行の講壇哲学とその信奉者たちのことを，深い意味がある思想を展開しているかのように見えることもあるかも知れないが屁理屈を捏ねているだけだ，と一刀両断に切り捨てた[1]。ニコライにとって，フィヒテを党首とする新しい講壇哲学は，手の込んだ概念装置を用いて健全な常識と社会の基盤を揺るがす捨て置きならないものだったのである[2]。これに対してポストカントの筆頭である哲学者フィヒテは，堪忍袋の緒が切れて，一介の書籍商に過ぎないニコライを主人公に仕立てて痛罵するニコライばりの風刺小説を書いて笑いものにしようとした。フィヒテからすれば，哲学の何ぞやも知らぬ年寄りに好き勝手に狼藉を働かせておくわけにはいかなかったのである。

とは言え，われわれの生存を可能にしている常識からすれば，話は違ってくる。ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770–1831）により「主観的観念論」というレッテルを貼られたフィヒテの自我の哲学が，カントの「コペルニクス的転回」同様，世間にそのまま受け容れられるとは考えにくい。その意味では，ニコライの批判は常識からして真っ当である。哲学研究者からも白い目で見られることも多いドイツ観念論の立場をどのような仕方で正当化するのかという課題は，われわれ専門家が思っている以上にデリケートな問題である。そのことにどこかで気付

---

1 Vgl. z. B. *Neue allgemeine deutsche Bibliothek*, Bd.56, St.1, Hft.2, Berlin und Stettin 1801, S.167.

2 戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人 ── フリードリヒ・ニコライ』朝文社，2001 年，214 頁参照。

いていたからこそ，フィヒテはあのような感情的反応を露骨に顕した著作を物したのではないか。だとすると，この著作はフィヒテの哲学的思考の弱点を問い直すためにも重要な作品だと考えられる。加えて，フィヒテの自我の哲学は，(可分的)自我と(可分的)非我の対立を自我の努力によって克服するという自己救済の道を辿る(生を送る)ことによって絶対者へと至らんとする根本動向からして，宗教哲学的性格を有するのであり，したがってこの著作は，自らこの意味での自我の哲学を問い直すための格好の素材ともなろう。以上がこの試訳を本紀要に寄稿する所以である。補足的な理由としては，ニコライが『1781 年におけるドイツ・スイス旅行記。学識，産業，宗教，風俗習慣に関する所見を添えて』(*Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz, im Jahre 1781. Nebst Bemerkungen über Gelehrsamkeit, Industrie, Religion und Sitten*, Bd.1-12, Berlin und Stettin 1783-1796) を執筆していることもあり，そこから見て取れるニコライの宗教理解を揶揄している箇所（特に，第 9 章と第 10 章）も見られることを挙げておきたい。

もう一つ，訳文に散見される文語調に近い表現と下品な言い回しについてお断りしておきたい。こちらは原文の調子を再現するために訳者が意図的に採用しているものであるが，その能力の低さに起因して過度であったり不十分であったりするところも恐らく多いであろう。その責めについては甘んじて受けたい。

最後になるが，訳文を修正する上でお世話になった方々に謝意を表したい。本試訳の原型は，訳者が東京在住時に参加していたフィヒテ読書会において検討して戴いた。そのときのメンバーである杉田孝夫氏，大橋容一郎氏，湯浅正彦氏，美濃部仁氏，鈴木伸国氏から戴いた貴重なご指導ご鞭撻によって，当初の誤訳のかなりが修正された。この読書会及びその後の飲み会での多種多様な学びが翻訳作業をさまざまなかたちで支えてくれていることにも感謝したい。この会とは別に，カント研究者で，昨年に『カントと啓蒙のプロジェクト ――『判断力批判』における自然の解釈学』(法政大学出版会)を出版するかたちで博士論文の成果を公表された，相原博氏にも訳稿のチェックをして戴いたこと，また，本研究所所員の内田博先生に訳語のご教示を戴いたことについてもお礼申し上げたい。併せて，このようなご助力にもかかわらず，数年にわたって

放ったらかしにしていた訳者の怠慢について謝罪したい。今回公表するに当たって順次再検討していることも含めて，訳文の責任は当然のことながら訳者のみに帰属する。本誌での刊行を機会に，更なるご指導ご鞭撻をより大勢の方々から頂戴できると幸甚である。

訳文

367 編者序文

本書の著者は，当初はこの著作を自分の監督下で印刷するつもりであった。その時にたまたま邪魔が入った[訳注1]こともあり，また，文章に起こすに当たって友人たちに知らせて機会を設け語り合うことによって差し当たっての目的が実際にはすでに達成されていたこともあったので，彼はこの件に関してこれ以上煩わされたくないと思い，完全に手を引いてしまった。原稿は仲間内を回って私の手元にも届いた。著者自身が序文を書き添えなかったために，たとえば私がこの原稿をどうにかしたいと思っても制約がある。そういうわけなので打ち明けて言おう。ある独特の仕方で妙な奴に関する委曲を尽くした説得力のある性格描写を公衆に知らせないでおけば，私は良心の呵責を覚えることになるだろう。フィヒテの品位からすれば，もしかするとこれまで続けてきた侮蔑的な沈黙を今も破らないでいることの方がよりふさわしいことかも知れない。しかしながら，彼がいったんはきわめて多くの言葉と筆の労力をニコライなんぞに費やすという寛大さを気前よく示したのだから，私の責任で，彼の取った慇懃無礼な態度を世間に知らせるという第二のことも敢えて彼に要求する。ニコライに関して言うと，本書を編集することによって，彼に対して最大級の恩恵を施すことになることを，私は十分に心得ている。主だった敵対者たちに自分のくどくどした論難書群を読ませるまでには今まで一度も至っておらず，ましてや答弁までは，といったありさ

訳注1 「その侮辱的な論調のために，この小冊子はベルリンの検閲当局から出版許可を拒否された」（戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人 ── フリードリヒ・ニコライ』朝文社，2001年，214頁）。

まの彼であり，敵対者たちから弾みで漏れた嘲罵の言葉をたかだか二言三言どうにか引き出したに過ぎない彼である。そんな彼にとって，フィヒテが今現に実在している人物である彼と正式に係わり合い，彼の人間性を原理に基づいて構成し，彼のことをできれば彼自身にとって理解可能なものにしてやること以上に輝かしいことがありうるだろうか。本書が刊行される日が彼の長い人生で最も名声に満ちた冠を戴く日であることに議論の余地はなく，どのみちもう体力の弱い高齢にある彼がそのような過度の喜びと栄誉に耐えて生き抜くことはないのではないかと心配になるやも知れぬ。私の方は，彼の以前の著作できちんとした称賛を受け，最新作でも知識と才能があると認められるという辱めを受けたのだから，彼には私からそのような歓待を受けるいわれなどまったくなかった。しかしながら，以下に続く本書を読めば私はそこで支配的なものとなっている寛大な気分になれたわけだし，彼がこのような思い上がりの罪を再び犯すことがないならば，これまでのことは水に流すことにしようではないか。

序論　369

私はフリードリヒ・ニコライが私の著作に対して無数に罵詈雑言を浴びせたり曲解したり[訳注2]しても，もっぱら著作が的になっている間は沈

訳注2　フィヒテとフィヒテ哲学に対するニコライの厳しい批判は，すでに 1796 年の『1781 年におけるドイツ・スイス旅行記。学識，産業，宗教，風俗習慣に関する所見を添えて』(*Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz, im Jahre 1781. Nebst Bemerkungen über Gelehrsamkeit, Industrie, Religion und Sitten*, Berlin und Stettin. 以降，『ドイツ・スイス旅行記』と略記) 第 11 巻から始まっており，『フリードリヒ・シラーの 1797 年版ミューズ年鑑に対する補遺論考』(*Anhang zu Friedrich Schillers Musen-Almanach für das Jahr 1797*, Berlin und Stettin 1797)，『ドイツの哲学者，ゼンプロニウス・グンディベルトの生涯と意見。最新ドイツ哲学の二編の資料を添えて』(*Leben und Meinungen Sempronius Gundibert's eines deutschen Philosophen. Nebst zwey Urkunden der neuesten deutschen Philosophie*, Berlin und Stettin 1798. 以降，『ゼンプロニウス・グンディベルト』と略記)，及び，『私の勉学修行時代，批判哲学

黙を守ってきたが，それは，公衆[訳注3]のうちでニコライが文学上の問題について発言権を持つ層がまだ存在するのであれば，そうした層に対して発言権を持ちたいと望んではいないからである。だが今やニコライは，私個人の名誉を毀損するまでに及んでいる。なぜなら，『新ドイツ叢書』第56巻第1号第2分冊の後半から第3分冊の前半にかけて掲載されている，名誉を毀損する内容の紹介書評の筆者が彼であることは疑いの余

に関する私の知識と著作，及び，カント，J. B. エアハルト，フィヒテの各氏について』（*Ueber meine gelehrte Bildung, über meine Kenntniß der kritischen Philosophie und meine Schriften dieselbe betreffend, und über die Herren Kant, J. B. Erhard, und Fichte. Eine Beylage zu den neun Gesprächen zwischen Christian Wolf und einem Kantianer*, Berlin und Stettin 1799）へと続いていった。ニコライだけでなく，彼が創刊し，出版社が移ってからも編集に関わり続けた書評誌『新ドイツ百科叢書』（*Neue allgemeine deutsche Bibliothek*. 以降，NADB と略記）も絶えずフィヒテ及び知識学を攻撃していた。シェリングはニコライから最初に厳しい批判を受けた段階で対抗する文書によってニコライを糾弾する計画を持っており，1796年5月8日付のニートハマー（Friedrich Philipp Immanuel Niethammer, 1766–1848）宛書簡に次のように書いていたということである。「私はニコライ氏の旅行記に対してふさわしい仕方で応答したいと強く思っています。［中略］私には，権勢を誇るN氏に対しても立ちはだかる勇気と力がみなぎっています。とは言え，その際に親友たちの助言が加勢してくれればと願っています。他の人（たとえばフィヒテ）にもこのことについて伝えて戴ければ，ますますありがたいのですが！」（*J. G. Fichte im Gespräch*, Bd.1, hrsg. von E. Fuchs, Stuttgart 1978, S.347）。そしてニコライによる第二次攻撃をきっかけに，自分の計画に立ち返った。「この口先だけ達者な輩特有の羊のごとき忍耐力のかぎりを尽くして，この輩の心の奥底の弱みをできるだけ通俗的でだれにでもわかるように丸裸にするために，向こう数週間に亘って自ら進んで忍耐の要請（votum patientiae）を引き受ける者が何とか現れてくれるとよいのですが。」（1797年2月8日付ニートハマー宛書簡。*J. G. Fichte im Gespräch*, Bd.1, S.403 f.）。Vgl. GA I/7, S. 369 Anm.2.

訳注3 「公衆」（Publikum）とは，カントの『啓蒙とは何か』によると，本来的には，事の善し悪しや見解の正当性を自由な議論において共に明らかにしようとする「学識者」（Gelehrter）のことである。Vgl. Immanuel Kant, *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?* (1784), in: *Kant's gesammelte Schriften*, Bd.VIII, hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Berlin 1912, S.33–42, besonders S.36–38.

地がなく，証明の必要はないからである[訳注 4]。ニコライが自分で書いたこ　370
とを否認するという想定外の場合でさえ，私はこのような証明を行ったりはしないだろう。なぜなら，この存命中の物書きと面識があるものな

訳注 4　ここで問題になっている書評は以下のものである。

1) Zeitschrift für die spekulative Physik, herausgegeben von Schelling. Ersten Bandes erstes Heft. Jena und Leibzig, bey Gabler. 1800. 260 S. Gr. 8. 16 g.
2) Ueber die Jenaische Allgemeine Literaturzeitung. Erläuterungen, vom Professor Schelling in Jena. Aus dem ersten Hefte der Zeitschrift ec. besonders abgedruckt, gr.8.
3) Intelligenzblatt der Allgemeinen Literaturzeitung vom Jahre 1800. Nr.57 und 62: Vertheidigung gegen Herrn Professor Schellings sehr unlautere Erläuterungen über die A. L. Z. Vom Herrn Hofrath Schütz in Jena.
4) Dasselbe Nr. 77: Herrn Justizrath Hufelands Erklärung einer Stelle in obiger Vertheidigung des Herrn Hofrath Schütz.
5) Dasselbe Nr. 104: Herrn Heinrich Steffens Erklärung wider J. R. Hufelands ebengedachte Erklärung, und dessen und Herrn Hofrath Schütz Antwort darauf.
6) Dasselbe von 1799 Nr.145: Herrn Professor A. W. Schlegels Abschied von der A. L. Z. nebst der Herausgeber Erklärungen über diesen Abschied.
7) Poetisches Journal, herausgegeben von Ludwig Tieck. Erster Jahrgang, erstes und zweytes Stück. Jena, bey Fromman. 1800. 492 S. 8. 1 Rl. 16 g.
8) System des transscendentalen Idealismus, von F. W. J. Schelling. Tübingen, in der Cottaischen Buchhandl. 1800. 486 S. gr. 8. 1 Rl. 20 g. (NADB, Bd.56, St.1, Berlin und Stettin 1801, S.142.)

実際の内容については，以下を参照。Vgl. *a.a.O.*, S.143-206. ニコライ自身がこのことを認めている（Vgl. Friedlich Nicolai, *Ueber die Art wie vermittelst des transscendentalen Idealismus ein wirklich existirendes Wesen aus Principien konstruirt werden kann. Nebst merkwürdigen Proben der Wahrheitsliebe, reifen Ueberlegung, Bescheidenheit, Urbanität und gutgelaunten Großmuth des Stifters der neuesten Philosophie, von Friedrich Nicolai.* [*2 Motti*] *Eine Beylage zum LXI. Bande der N. Allg. D. Bibl.*, Berlin und Stettin 1801 (66 S.), S.8)。Vgl. GA I/7, S.328 Anm.5, 369 Anm.2.

らだれにとっても，これを書くことができたのはただ一人，フリードリヒ・ニコライだけであったことは明白だからである。── 私は確かにニコライ氏に対しては，私に対する弾劾についてその内容が事実だと彼自身は信じていないにせよ，軽率にも私を弾劾することによって彼が人として敬意を払われることが一切なくなっているにせよ，ともかく彼に対してはそういう責任はない。── しかしながら，そうした弾劾を完全に，もしくは半分信じていると思しき公衆に対してはおそらく，面と向かって申し開きをする義務があるだろう。──

さて，結局のところニコライに強要されて[訳注5]，彼の存命中にもかかわらず彼について語ることになるからには，本書で同時に，見積もっていたより早くではあるが，昔から目論んでいたことを実行に移す。詳しく述べよう。ためらわずに白状するが，自分を取り巻く世界のことを知って意見まで持つようになってからというもの，学問がろくでもない扱いを受けることほど私にとって軽蔑すべき憎らしいことはない。と言うのも，そういう輩は，私たちの手に入るさまざまな事実や意見をかき集めるが，そこには何らかの脈絡や目的があるわけではなく，ただたんにかき集めて，あれこれとくだらないことをぺちゃくちゃしゃべっているだけだからである。つまり，あらゆる事柄に関して，やれ賛成のやれ反対のと言い争いはするが，何らかの事柄に興味があるわけでもないし，そうした事柄を究明したいと思うことすらないからである。そうした輩は，人間の知識はみなくだらないおしゃべりのネタに過ぎないものと見ている。そしてそこで最も必要とされるのはわかりやすいことであって，化粧しながらであっても講壇であってもそのことに変わりはないのだ。すなわちこれはあのおもしろみのないお粗末な知識なり能なしの考えであり，借り物の折衷主義と呼ばれるものなのである。そうしたことは，かつてはありふれたことと言ってよかったし，今もなお非常に頻繁に見受けられることなのである。── 自分自身の仕事，及び探究はまじめな目的のために行われてきたものであるとともに，より良い精神によって導かれてきたものであり，常に上述のような好ましくない傾向に対する対

訳注5　ニコライによる名誉毀損によって筆を執らざるを得なくなった，というフィヒテの主張。

抗手段であり続けねばならないが，これ以外にも，きわめて目的に適った第二の対抗手段があると私には思われる。それは，学問を上述の輩のように扱えば必然的に，真理やまじめさや徹底性に対する感覚がすべて完全に押し殺されてしまい，根っからの精神の倒錯や錯乱に陥ってしまうことを活写することである。私たちの時代におけるこのような根っからの精神錯乱と狂気に関するこの上なく完全な事例は，彼のことを知ってからというもの ── 私はメンデルスゾーンとヤコービの論争で彼のことを知るようになったのである[訳注6]──，私にとってはずっとフリードリヒ・ニコライであった。そんな彼の姿を，彼が本末転倒のキャリアを締 371
めくくっていたとしたなら，無論そんなことを彼が成し遂げるとしたら死をもってでしかないだろうが，彼の辿った道を歩む傾向がある研究途上のすべての若者たちと，そうした若者たちの教育に影響力を持つすべての人たちとに対して，他山の石として示したいと思っていたのだ。

このような昔からの目論見を私は今すぐ実行に移す。ただしそういった仕事は，ニコライに対して自分自身を弁護しているに過ぎないと受け

訳注6　1783 年に，メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn, 1729–1786）とヤコービ（Friedrich Heinrich Jacobi, 1743–1819）との間で，レッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729–1781）が晩年スピノザ主義者であったかどうかをめぐって争われた論争のこと。ヤコービは 1785 年に『モーゼス・メンデルスゾーン氏宛書簡にしたためたスピノザの教説について』（*Ueber die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herrn Moses Mendelssohn*, Breslau）という著作を刊行し，この論争の事の次第を説明するとともに，レッシングはスピノザ主義者だったと彼が主張する根拠を提示した。一方，メンデルスゾーンは 1786 年に『モーゼス・メンデルスゾーン，レッシングの友人たちに宛てて』（*Moses Mendelssohn an die Freunde Lessings*, Berlin）を出版してこれに応戦し，更にヤコービは同年『フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ，スピノザの教説についての書簡に関するメンデルスゾーンの非難に抗す』（*Friedrich Heinrich Jacobi wider Mendelssohns Beschuldigungen betreffend die Briefe über die Lehre des Spinoza*, Leibzig）を刊行して再反論を繰り広げた。ニコライはこの論争に対する自らの立場を『ドイツ百科叢書』（*Allgemeine deutsche Bibliothek*. 以降，ADB と略記）第 65 巻と第 68 巻で明らかにしていた。こうした文献資料に精通していたであろうフィヒテは 1786 年当時，家庭教師としてザクセンに滞在していた。Vgl. GA I/7, S.370 f. Anm.3.

取られようものなら深く恥じ入りながら取りかからざるを得ないわけだが，むしろ今すぐ実行することによってこの仕事にもっとリベラルで一般的な方向性を与えるように努める。ニコライ自身は，これから描かれることの真偽について尋ねられることがあったとしても，気分を害してはならない。彼が生涯にわたって採用してきた，この国の最も偉大で功績のある人物たちの扱い方[訳注7]からすれば，彼が他人に対して行使することを自分に容認しているのと同じ権利を他人が彼に対して行使することを一瞬でも容認することさえできたなら，自分が決してわきまえることのなかった配慮が彼に向けられることもないし，彼がまだ存命中であることが考慮されずに彼を単なる題材とする探究がためらうことなく彼の面前で行われることを，彼自身まったく公正なことだと認めざるをえないのである。

もっとも，このような試みをした場合，完全に正反対の二つの方面から非難を受けることは私も予想している。まずは，芸術や学問について本質的には私と同様の考えを持つ人たちから非難が上がる。彼らからすると，私の承知しているかぎり，ニコライはあまりにも価値のない軽蔑すべき対象なので，彼らの見るところでは，ニコライに言及したり注目したりする価値があるなどと認めてしまえば，そう認めた者はもっぱら自分自身の価値を下げることになるほどなのだ[訳注8]。それはまったく彼ら

訳注7　アカデミー版全集でニコライの厳しい批判と風刺の対象として特に挙げられている者は以下の通り。J・G・ヤコービ（Johann Georg Jacobi, 1740-1814. F・H・ヤコービの兄），ビュルガー（Gottfried August Bürger, 1747-1794），ヴィーラント（Christoph Martin Wieland, 1733-1813），フォス（Johann Heinrich Voß, 1751-1826），ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832），シラー（Johann Christoph Friedrich Schiller, 1759-1805），ハーマン（Johann Georg Hamann, 1730-1788），ヘルダー（Johann Gottfried von Herder, 1744-1803），ガルヴェ（Christian Garve, 1742-1798），ラーヴァーター（Johann Caspar Lavater, 1741-1801），エアハルト（Johann Benjamin Erhard, 1766-1827），カント，そしてフィヒテ。Vgl. GA I/7, S.371 Anm.4.

訳注8　たとえば，フリードリヒ・シュレーゲル（Karl Wilhelm Friedrich Schlegel, 1772-1829）は，『ゼンプロニウス・グンディベルト』を受けて，ニコライについて，1798年5月5日付のニートハマー宛書簡に次のように書

の言うとおりであり，私の意見も何ら変わりはないのだが，それはニコライのことを一人の人間として語る場合の話である。しかしながら，まったき精神倒錯の姿を完全に具現する客体として見るなら彼は，私の考えからすれば，文学史家や教育家にとって重要であり，心理学者にとって 372
奇抜な馬鹿が，生理学者にとって変わり種の奇形児が興味を引きうる最大限のレベルで興味を引くものである。私の対象に対するこの種の興味関心を惹起することができなかったとすれば，私に責めがあることを認めよう。

次いで，人の良いありきたりの人たちからの非難を覚悟しておかねばならない。彼らは，カント[訳注 9]，ゲーテ，シラー[訳注 10]のような偉大なドイツ人が件の対象について下す判断が世間の耳目に触れるようになってからというもの，さまざまな文学の片隅から[訳注 11]，それでもやはりかの男の

いている。「老ニコライは，またしても不和を招くような文章をいくつか書き，たとえば私のことで言っても，私が自らすすんで惜しみなく彼にくれてやること［訳注：ニコライに対する批判のこと］に楽しみの種を見つけているような始末です。考えようによっては，この雑誌［訳注：『哲学ジャーナル』（*Philosophisches Journal einer Gesellschaft Teutscher Gelehrten*, Bd.1–10, hrsg. von Friedrich Philipp Immanuel Niethammer und Johann Gottlieb Fichte, Jena und Leipzig 1795–1798）のこと］とフィヒテも大きな痛手を被っているのです。どちらが彼のことをやり込める場合でも，封書限定にしてもらえないでしょうかねえ」（*J. G. Fichte im Gespräch*, Bd.1, S.516 f.)。Vgl. GA I/7, S.371 Anm.5.

訳注 9　ここでフィヒテが念頭に置いているのは以下のもの。イマヌエル・カント『本屋稼業について。フリードリヒ・ニコライ氏宛の二通の書簡』（*Ueber die Buchmacherey. Zwey Briefe an Herrn Friedrich Nicolai,* Königsberg 1798）。

訳注 10　ここでフィヒテが念頭に置いているのは以下のもの。ゲーテ，シラー『クセーニエン』（*Xenien*）（『1797 年版ミューズ年鑑』（*Musenalmanach für das Jahr 1797*）所載）。

訳注 11　アカデミー版の編者は，ニコライ擁護論の具体例として，二つの事例を挙げている。一つは，バルディリ（Christoph Gottfried Bardili, 1761–1808）が『第一論理学綱要』（*Grundriß der Ersten Logik*）などの自著をニコライに献呈していたことであり，もう一つは，クリスティアン・ゴトフリート・シュッツ（Christian Gottfried Schütz, 1747–1832）がニコライが書いた『アーデルハイト・Bから女友達のジュリー・Sに宛てた親しさのあふれる手紙』

重要な功績も忘れるなと迫ってくるのである。私は，ニコライ個人としては生涯を通して何か利口なことに取り組んだことなど一度もなく，もっぱら本末転倒で愚かなことばかりに手を出したのだという確信，彼に帰せられるのはわずかばかりの功績ですらなく科（とが）だけだという確信を撤回することもないし，こうした確信の根拠を示すのを忘れることもないだろう。彼のありきたりの代弁者たちは，彼らがニコライの重要な功績について語っていることを実際に知っているのだと思い込んでいるというのが事の真相なのだ。ニコライと取り巻き連中[訳注12]は確かに四半世紀を超えて，ニコライには功績があると何度も何度も繰り返してきたのだが，その結果最終的にかの代弁者たちの記憶にしっかり刻まれたことはと言えば，そんなことが言われていたということ［に過ぎない］かも知れないのだ。万一ニコライや取り巻き連中が同じ主張をきっかけさえあれば今でも繰り返したいと思っているのだとすれば，今度ばかりは，常と同じようにもっぱら不明瞭なかたちで約束するのではなく，私に対してかの功績の一つを自分の名前を出して明らかにするよう願う。すなわち，私に対して，ニコライの意に適う正しい的確な判断，ないし知る価値のあることについて彼が書いたきちんとした論文が何か一つでもあることを示して戴きたいのだ。それは私がその論文を知るためでもある。私はかの代弁者たちに対して，これを機会に次のことを自問自答するよう要請する。たとえば一体どのような精神の力ないし才能においてニコライ氏が優れていると言いたいのか，それは空想の力なのか，機知なのか，感覚の鋭さなのか，はたまた思慮深さなのか。それとも，優れた文体ではなく，せめてものこと，きちんとした文体で言うが[訳注13]，尽きるこ

（*Vertraute Briefe von Adelheid B** an ihre Freundinn Julie S***, Berlin und Stettin 1799）について，『一般文芸新聞』（*Allgemeine Literatur-Zeitung*. 以降，ALZ と略記）で肯定的な書評を上梓していたことである。Vgl. GA I/7, S.372 Anm.8.

訳注12　ニコライは，ドイツの文芸誌の中で最大の発行部数を誇った『（新）ドイツ百科叢書』にいつでも彼の意向に沿って書いてくれる批評家を 150 人抱えていた。『新ベルリン月報』（*Neue Berlinische Monatsschrift*）の編者，ヨハン・エーリヒ・ビースター（Johann Erich Biester, 1749–1816）は，彼と懇意にしていた。Vgl. GA I/7, S.372 Anm.9.

訳注13　ニコライと取り巻き連中が言葉を操ってそれっぽい批判もどきを仕立

とのない無駄話や，彼の手にかかれば何でも曲解されてしまうといった手練手管などのような風変わりなものが彼には見受けられるのか，よくよく見極めてもらいたいのだ。要は，こうした問いについてまずは自分自身に対して答えを出してから私にも答えてもらいたいのである。私は彼らがどちらも満足のいくかたちでやり抜くことなどないだろうと十二分にわかったので，彼らが何一つ口に出さなかったかのように私がふる　373
まうことや，彼らがその場に居合わせていないかのように私が扱うことについて，彼らに容認してもらいたいと思う。

私たちの企図していたところのものに取りかかろう。

我らが主人公の生涯と奇妙な意見を，思いつくまま行き当たりばったりに取り上げるといった叙事詩調でも，あるいは年代順でもなく，あくまで体系的に叙述し，しっかりとした性格描写をしながらまとめるのがよいのだとすれば，こうした性格の有する一個の根本原理を明らかにし，そうした原理から，いや，そうした原理のみから，我らが主人公の生涯におけるあらゆる現象が満足のいくかたちで説明できることを示さねばならない。こうした場合に重要なことは，そうした現象を積み上げることではない。前提された原理に基づかなければ決して説明できないものが一つあれば，そうした証拠を何千と挙げるのと同じように適切に，説明されるべき生涯の根底にあるのはこの原理だけであって他のものは一切そうではないことが証明されるのだ。

およそしっかりと形成された性格の根底には常にそのような統一の原理がある。違いはと言うと，このような性格の持ち主がこれこそが自分の原理だと知っているのか知らないのかに尽きるのだ。性格が自由と意識を伴いながらかの原則に従って形成されているのであれば，この原則は当然ながらこの性格の持ち主の知るところとなっているし，この性格が偶然，自然や運命の巡り合わせによって後天的に身についたものであれば，この原理は知られないままである。我らが主人公は後者なのであり，それゆえ，彼の思考と行動の一切を統べる原則のことを彼が知るようになるなどとは到底信じるわけにはいかないのだ。

て上げているのに対して，自分は実直に事実を述べるのだ，というフィヒテの嫌み交じりの表現。

私たちは，上述のすべての点からわかるように，まずは我らが主人公の有する知性面の性格の根本原理（と言うのも，これだけがここで問題にすべきことだからである）を提示し，ある種の諸現象について，もっぱらかの原理にのみ基づくことによって，委曲を尽くして，かつ，まったく十全に説明されうることを示さねばならない。この点，すなわちそれ以外の説明は絶対に不可能であるという点に依拠することによって，私たちがこれこそ原理だと言っていることが正当なものとなるのだ。したがって私たちは，我らが読者に対して，とりわけこの点に注意を向けられんことを願う。次いでさらに，我らが主人公の性格が持つ特異な根本的特徴，かの原理からのみ説明できる特徴をいくつか挙げ，そうした諸特徴が確かに存在することをそれらの現象によって裏付けし，そうすることによって我らの掲げる根本原理の正当性の証明を閉じる。

ここで描写する際には一貫して我らが主人公を死者とみなし，彼について過去の人物を扱うようにして語る。これは性格描写一般に固有のことである。通常，別のところで存命中の人の性格を描写できないことに
374 は理由がある。それは，一連の現れがまだ完結しておらず別の説明原理に帰着させてもかまわないような新しい現象が生じないことが決して確実ではないので，たとえばその人物がまだなお自由によって自らの格率を今後変更することがないのかどうかも知りえないからである。しかし，ニコライの場合はそうした描写ができない理由はまったく存在しないのである。望むらくは，以下の描写において彼の思考様式の原理そのものが内在的に見て変更不可能であることが示されんことを。我らが主人公は凝り固まっており，もはや自らを変えることもできないし，変えられることもありえない。要するに，次々と起こる彼の生涯の現象が完結していなくとも，あくまでそれが彼の性格なのだ。この文章をしたためている著者が心の底から確信していることを申せば，フリードリヒ・ニコライが最期を迎える前にここで彼に特有のものとされた根本的特徴や行動様式の何か一つでも変えたことがはっきりしようものなら，人間の知識に対する著者自身の要求の一切合切を喜んで撤回するだろう。

第１章　我らが主人公の全精神活動の出発点をなす最高原則　375

我らが主人公が熟年になってからずっと堅持していたのは次のような意見であった。すなわち，可能な人間の知はすべて彼の心の中に含まれていてそれに尽きるのでありそこに保存されているのだ，という考えであり，あらゆる学問の見解，取り扱い，内容，及び価値に関する彼の判断は嘘偽りや誤りのないものであり，他のすべての理性的存在者の判断において彼ら自身の理性の在り様の規準や試金石として資するものなのだ，という考えであった。一言で言えば，今まで彼は任意の学問分野において正しく役に立つことは余すところなくすべて考えてきたのであり，自分がこれまで考えてこなかったことやこれから考えないことはみな正しくないことであり役に立たないことなのだ，と思っていたのである。

このような意見に囚われることによって彼は，ひょっとしてたとえばこれについては自分がまちがっているかも知れないとか，あれについてはそうかも知れないなどといった疑念を持ったり，後から検証したりそうしたことに憂慮することが一切なかっただけでなく，その上さらに，他のあらゆる人間について，彼自身がある事柄をどのように見ているのか正しく知りさえすればただちにいささかも疑うことなくこれを受け入れるはずだと堅く信じ，彼らにそのことを要求する始末であった。彼の反論はすべて「私の意見はちがう」という主文から展開された。したがってやはり，この主要論拠に傍証を加えないのが彼の常であった。彼の信ずるところによれば，彼に敵対する者たちは，この論拠をもってすればもう十二分に自分たちが正しくないとわきまえることができるのであった。後年衰退の時代を迎えて叱ったり酷評ばかりしているしかなくなった際に彼は常に，自分の助言に従って行動しなかったことを示すことから始めるしかなかった。これ以外にはもう，敵対する者たちを恥じ入らせ，己のことを深く反省させる方法はないだろうと，彼には思われたのである。

このような前提に立っていたので，彼はどんな奇妙な出来事が起ころうともやはり，そうしたことによって狼狽するようなことは一切なかった。それどころか，彼に対して，晩年にはよくあったことだが，ある事柄については自らしかるべく判断を差し控えるようにとか，あるいはま

た，生来の愚か者，退屈な饒舌家，頭のおかしなじじいだとか，みなが好き勝手に彼に関して言っていることがもっとあるが，そうした言葉があらゆる点で一致したかたちで投げつけられた場合でさえ，どうやら彼は常にむしろ，そうした輩はただふざけて，しかも受けた酷評の恨みを
376 晴らすべくそんなことを言っているのだと決めてかかりたいようで，ニコライのような人物を認めることはできないと心中で大まじめに考えているという［あくまで彼の目から見て］あべこべなことをしかねないような人間がいるなどという前提には立ちたくないようであった[訳注14]。

彼自身に関するこのような意見は次第に彼の固定観念となり，彼の自己と絡み合って，彼の最も内奥の最も固有の自己にまで成長したので，彼が同じ意見をはっきりと自分のうちに知覚し，はっきりと意識に上らせた痕跡はないのである。彼は多弁を弄し，判断し，裁定を下したが，それは彼の唯一可能な立脚点であるこの意見に基づいてであって，これについて云々することは一度としてなかった。したがって，彼はうんざりするほど生きながらえたうえで亡くなったが，自分の思考を自分自身のなかだけですら完全に遂行することはなかったのである。

（第２章以降は次号以降に続く）

訳注14　この章で述べられていることからわかるように，このような構造は第三者の客観的な分析によって明らかになることであって，ニコライにはそのことを自覚することなどできないのであり，したがって前者のように決めてかかりたいという自覚的欲求がニコライにあるという記述ではないことに注意されたい。